

『ヨーロッパの町と村 そのデザイン、アメニティ、プランニング』

井上 裕・井上浩子 著

農業・農村領域上席主任研究官 中山 雅章



『ヨーロッパの町と村 そのデザイン、アメニティ、プランニング』

著者／井上裕・井上浩子

頁数／286ページ

出版年月／2006年6月初版第1刷

2010年1月初版第2刷

発行所／株式会社グラフィック社

ヨーロッパの農村を訪れて、まず、感じることは、その美しさと居心地の良さである。街並みや個々の建築物といった線や点の美しさのみならず、より広く面として美しい。また、村の中を歩き、村の人の生活の様子をみていると、居心地が良く、ここに「住んでみたい」、「暮らしてみたい」との想いが込み上げてくる。日本の農村とは、歴史や風土などは大きく異なるが、まちづくり、むらづくりの面で参考になることが多いように思える。

この本は、日本に居ながらして、ヨーロッパの町と村の美しさ、暮らしやすさを体験させてくれるとともに、ヨーロッパの町や村の魅力の源泉とその要因（そして、日本のまちづくり、むらづくりとの違い）について、理解を深めてくれる。

本書の内容を紹介しよう。まず、ヨーロッパの町や村の誕生・発展の歴史を振り返った上で、地域別に5つのグループに分けて、131の町や村の実例が美しい、多くの写真で紹介されている。また、それぞれの紹介の合間に、著者がアメニティづくりにおいて最重要と考えている4つの要件、「街並みの保存」、「車社会への対応」、「観光との共存」、「地域施設整備のあり方」についての解説が挿入されている。これら解説のパートには、日本のまちづくり、むらづくりの常識に潜む問題点に光をあてたコラムも設けられている。最後に、ヨーロッパの地域づくりに重要な役割を果たすプランニングの仕組みが、実例に沿って、詳しく紹介されている。

紹介されている131の町や村をみると、それぞれが個性的で興味あふれるとともに、国や地域の持つ多様性にも驚かされる。イギリス、湖水地方のコールドベック、村の中心部の遠影や趣のある建物や橋の美しい7点の写真、「…村はずれにヴィレッジ・グリーンと池があり、村の教会、牧師館、古いコテージ、村に1軒だけ残ったパブ、再建された水車小屋、住宅に改造された昔のビール醸造所などが点在している。今でも清らかな小川の流れが印象的だ。教会の近くに建つ…」との村の由来・歴史、様子等を紹介した文章等から、しっとりして心地よい雰囲気がかがわれ、心惹かれる一方、スペイン、アンダルシア地方のモンテフリオの、アテネのアクロポリスを思わせる急峻な丘の上に建つ教会とその下に広

がる村という印象的な景観、オリーブ畑と白い家々に代表される乾いた地域の感触にも心が奪われる。

この本はコラムも魅力的だ。ヨーロッパと

日本のまちづくり、むらづくりを比較する中で、日本における問題点について実体験に裏打ちされた具体的な知見が簡潔に述べられている。「最もやってはいけない都市計画」、「資材置場や倉庫などの醜いものはどこにあるのか」、「公共駐車場の整備が街並み保存と観光客の増加をもたらす」、「ヨーロッパでの小売・外食の全国チェーンや大型小売店のつくられ方」、「公共施設整備の基本：町や村から離れた孤立した施設はつくらない」等、タイトルをみただけでも読みたくなる。例えば、ヨーロッパの農村が面としての美しさを保っている理由の一つにつながる「資材置場や倉庫などの醜いものはどこにあるのか」の答えは、「道路沿いではなく、普通は幹線道路を走る車からは見えなように、少しわき道に入った所にある。そして、このわき道には、用のない車が入ってこないような工夫がしてある。」である。美しさを保つため、智慧を使い、手間とお金をかけているのである。

最後に、著者は、ヨーロッパにおいて、町や村の伝統的な街並み景観を守り、生活環境の魅力を高める上で、不可欠な手段となっているのが、プランニングであり、プランニングの制度や運用の実態は、日本とは比べものにならないほどに厳しいものであるといった趣旨のことを述べている。それでは、新たな規制を設けたり、規制を強化すれば、日本でもうまくいくのではと考えてしまうかも知れない。しかし、筆者が考えるに、地域整備や地域づくりの制度を支え、実効あるものにしていくのは、結局、地域の人達のその地域をどのようにしていきたいのかという思いである。本書のようなガイドに導かれ、一人でも多くの人達が実際にヨーロッパの美しい町や村を訪れ、その個性で生き生きとした姿と、それを支えている地域の人の思いや智慧に直接触れることが、紋切り型ではない地域に根付いた個性的な地域づくりの原動力になるのではないかと筆者は考えている。